

## 女子短大生にみられる性体験率の過大視と マス・メディア接触による影響

The overestimation of the rate of those who have sexual experiences and the influence of the mass media to that among junior college female students

若尾 良徳

### 要 約

This study investigated whether junior college female students overly estimate the rates of those who have sexual experiences among university, high school and junior high school students, and whether these estimations differ with the frequency of the exposure to mass media and with their own sexual experiences. Thirty-six junior college female students replied to the questionnaires. The results show that respondents estimated the rates of those who have sexual experiences higher than the actual rates in all grades for both men and women. The more they read magazines and watch television, the higher they estimated that rates of university students. Those who have sexual experiences estimated that rates of high school and university students higher than those who do not have. The influences of this overestimation to young people were discussed.

近年、若者の性行動の低年齢化、活発化が、社会問題としてしばしば取り上げられている。たとえば、文部科学省の審議会（2004、2005）や、東京都の委員会（2004）では、若者の性行動に対する対応が議論されている。また、様々なメディアにおいても話題となることが多い。現実には若者の性行動の低年齢化は進行しており、若者の性体験率はほぼすべての年代において男女ともに増加傾向にある（日本性教育協会、2001；東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会、2005；国立社会保障・人口問題研究所、2004など）。たとえば、日本性教育協会（2001）によると、高校生の性体験率は、1987年、1993年、1999年の過去3回の調査で、男子は11.5%→14.4%→26.5%、女子は8.7%→15.7%→23.7%と増加している。中学生の性体験率については、男子で2.2%→1.9%→3.9%、女子で1.8%→3.0%→3.0%と、高

校生ほど顕著でないものの、やはり増加傾向にある。さらに、最近の調査では、中学3年生の性体験率は、男子4.3%、女子9.8%、高校3年生では男子35.7%、女子44.3%と高い割合になっている(東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会、2005)<sup>1)</sup>。

### 若者の性体験率の現状認識

このように性行動の低年齢化、活発化が急速に進行するなかで、多くの若者は若者の性の現状について正確な現実認識が出来ているのであろうか。つまり、若者の性体験率について、若者自身が正確に認識できているのであろうか。東京都生活文化局(1982)が20年ほど前に行った調査によると、高校生を対象に同年代の性体験率を推測させた結果、実際よりも過大視していることが示されている。この調査では、高校生の性交を許容する者の割合は男子28.9%、女子11.4%であったが、現在では高校生の9割近くが性交をすることに許容的である(日本性教育協会、2001)。性体験率については、この調査では高校3年生の男子13.5%、女子14.0%であり、現在と比べると非常に低い水準である。つまり、20年前と比べると、性交に対する許容度においても、実際の性体験率においても飛躍的に高くなっているのである。本研究では、このような現状のなかで、最近の若者は、若者の性の状況について正しく現実認識をしているのかを検討する。現在では性体験率が高い水準になっているとはいえ、高校3年生においても過半数を超えるものではない。しかし、性体験率を過大視することは、「みんながしているから」、「自分だけが遅れてはいけない」、という意識が働き、若者の性交への動機づけを高める1つの要因になっている可能性がある。また、性体験がない若者にとっては、それが悩みの源になる可能性もある。20年ほど前には、高校生で性交をすることは規範からはずれた逸脱行為という側面もあったが、現在では性交を経験していないことが逸脱とみなされる可能性がある。そこで、本研究では、女子短大生を対象に、中学生、高校生、大学生の性体験率の推測に過大視がみられるかを検討する。

### マス・メディアが現実認識に及ぼす影響

人々の現実認識には、マス・メディアから受け取る情報が影響していることは古くから指摘されている。Gerbnerたち(Gerbner & Gross, 1976; Gerbner, Gross, Morgan, & Signorielli, 1986, 1994)は、テレビに描かれたシンボリックな現実が、主観的現実に影響すると考えている。Gerbner & Gross(1976)は、テレビの視聴時間が長い人は、教育程度や年代、性別に関わらず、視聴時間が短い人に比べて、現実には暴力に巻き込まれる可能性を高く推測することを示している。Gerbner & Grossは、テレビのなかには現実よりずっと高い頻度で暴力

場面が出現するため、テレビに描かれた現実を客観的な現実として受け入れるためであると考えている。Gerbnerたちは、このようにテレビのシンボリックな現実が人々の主観的現実に影響する過程を培養 (cultivation) と呼び、その分析を培養分析 (cultivation analysis) と呼んでいる。Gerbner & Gross (1976) の研究以降、性役割 (Morgan, 1982; Signorielli, 1989)、政治意識 (Gerbner, Gross, Morgan, & Signorielli, 1982; Piepe, Charlton, & Morey, 1990)、人種問題 (Matabane, 1988)、環境問題 (Shanahan, 1993; Mikami, Takeshita, Nakada, & Kawabata, 1995) などの様々な問題について培養効果が検証されている。

### マス・メディアにおける性描写

テレビが描く情報には、暴力だけでなく、性描写も非常に多いことが指摘されている。諸橋 (1998) によると、テレビメディアは発足当初から恋愛を重要な番組として位置づけており、恋愛を扱ったテレビドラマには性をテーマにしたものが多くみられる。岩男 (2000) は、1977年から1994年までの6つの年度のテレビドラマの内容分析を行っている<sup>2)</sup>。その結果、テレビドラマに含まれる性描写は、1977年は19%であったが、1994年には46%まで増加していた。年度によって多少の増減はあるものの、増加傾向は明らかで、6つの年度を平均すると番組の38%に性描写が含まれていた。岩男 (2000) は、「大人のドラマに性的に露骨な描写が増えてきたのにあわせて、夕方七時台に放送される子ども向けのアニメにも性的にどぎつい場面が増えている」(p. 24) と述べている。このようにテレビにおいて多くみられる性描写は、若者の性についての現状認識に影響している可能性がある。すなわち、テレビ、特にテレビドラマを長く視聴しているほど若者の性体験率を過大視すると予想される。

Gerbner & Gross (1976) は、テレビは視聴者に与える影響が他のメディアと決定的に異なると考え、テレビとそれ以外のメディアの違いとして次のような点を挙げている。テレビ以外のメディアは選択的であり、関心があるものしか接しないが、テレビは非選択的に情報が入ってくる。また、テレビ以外のメディアは、そこから情報を得るのにリテラシーが必要であるが、テレビは特別のリテラシーを要しない。しかし、現在の日本においては、テレビ以外に様々なメディアが発達し、テレビも選択されるメディアの1つとなっており、テレビのみが特権的な力を有するとは考えにくい。さらに、現在の日本においては、ほとんど全ての若者は十分にリテラシーを持っており、テレビ以外のメディアからも情報を得ることができる。実際に若者は、テレビ以外のマス・メディアからも性についての情報を得ていることが示されている。家庭問題研究所 (2003) の調査によると、女子高校生の性についての情報源として上位に位置するのは、少年マンガ・少女マンガ(45.8%)、テレビドラマ(24.4%)、

女性誌 (22.9%) となっている。また、日本性教育協会 (2001) によると、中学生、高校生、大学生の性に関わる行動や意識に影響を与えたものとして、「テレビ・ラジオ」以外にも「新聞や雑誌の記事」、「マンガ・コミックス」などが高い割合で選択されている。

若者の性についての情報源として大きな位置を占めている雑誌やマンガにおいても、性をテーマにしたものが多くみられる。谷本(1998)は、雑誌における恋愛記事の言説分析を行っている。それによると、1992年から1994年に出版された若者向けの雑誌69冊のうち845頁が恋愛記事であった。単純に計算しても、1誌につき10頁ほどが恋愛記事である。それらの恋愛記事を内容によって分類すると、「セックス」に関する記事が「魅力」「アプローチ」について多くみられている。雲野 (1996) は、1995年に発行された月刊少女マンガ雑誌9誌の内容分析を行っている。どのマンガ雑誌も恋愛を主体とした作品が多く、全体として恋愛にかかわる作品は66.9%含まれていた。恋愛と性交は必ずしも一致するものではないが、恋愛の段階がある程度進むと性交があることは現在の若者に共有されており (松井、1990)、それらのマンガ雑誌の中には性を扱った内容が含まれると思われる。さらに、若者に影響を与えていると考えられるマス・メディアとしては、この他に流行歌 (J-POP) が考えられる。流行歌の歌詞に性交に関する内容がどの程度含まれるかを調べた研究は見あたらないが、恋愛に関する歌詞が多く含まれていることが示されている。久保(1995)は1960年代後半から1980年代後半におけるニューミュージックの歌詞の変化を調べている。それによると、恋愛に関する歌詞は増え続け、1980年代後半には86.5%が恋愛をモチーフにした歌詞を含んでいた。このように、性や恋愛に関する情報を多く含んだマス・メディアは、テレビと同様に若者の性についての現状認識に影響していると考えられる。すなわち、これらのマス・メディアへの接触が多いほど、若者の性体験率を過大視する傾向があると予測される。

#### フォールス・コンセンサス効果

性体験率の推測には、マス・メディアへの接触の程度だけでなく、自らの性体験の有無が影響しているかもしれない。Ross, Greene, & House (1977) によると、人々は自分自身の行動選択や判断を、その状況では比較的一般的で適切であるとみなす一方、それとは別の反応は一般的でなく逸脱した不適切なものとみなす傾向がみられるのである。つまり、自分と同じ立場の人が多数派であると考えられる傾向がみられるのである。このような傾向は、フォールス・コンセンサス効果 (false consensus effect) と呼ばれる。この効果が働いているとすれば、性体験のある者は、性体験がない者より、性体験率を高く推測すると考えられる。

本研究では、女子短大生を対象に、中学生、高校生、大学生の性体験率の推測に過大視が

みられるかを検討する。また、若者の性体験率の認識に、テレビ (特にテレビドラマ)、雑誌、マンガ、J-POPといったマス・メディアへの接触が影響しているかを検討する。さらに、本研究では、性体験の有無によって、性体験率の推測に違いがみられるかを検討する。

仮説としては、(1)どの学年に対しても、男女どちらに対しても性体験率の過大視がみられる。(2)マス・メディアへの接触が多いほど、性体験率を高く推測する。さらに、この傾向は、短大生にとってはあまり身近ではない中学生や高校生を対象とした推測で顕著にみられると思われる。(3)性体験がある者は、ない者より、若者の性体験率を高く推測する。

## 方 法

### 調査協力者

関東の短期大学1年の女子学生36名。平均年齢22.55歳 ( $SD = 7.53$ )。

### 質問項目

(a)性体験率の推測。日本の中学生、高校生、大学生において性体験がある人の割合をそれぞれ男女別に0%から100%の間で推測するよう求めた。(b)メディアへの接触程度の指標。1日のテレビの視聴時間 (①見ていない、②1時間以内、③1~2時間、④2~3時間、⑤3~4時間、⑥4~5時間、⑦5時間以上)、1週間あたりのドラマ視聴回数 (①見ていない、②1回、③2回、④3回、⑤4回、⑥5回以上)、1カ月あたりの雑誌、及びマンガの閲覧回数 (①読まない、②1冊、③2冊、④3冊、⑤4冊、⑥5冊以上)、日本の流行歌 (J-POP) を聞く程度 (「聴かない」から「聴いている」の7段階) についてそれぞれ回答を求めた。(c)恋人の有無、性体験の有無についてたずねた。その他、本論文では報告しないが、日本の中学生、高校生、大学生における恋人のいる人の割合推測についてもたずねた。

### 調査手続き

2003年6月の講義中に実施し、その場で回収した。なお、回答に際して、他人の回答を見ないように教示し、回答しない自由もあることを伝えた。

## 結 果

### 性体験率の過大視の検討

学校別、男女別の性体験率の推測の平均値、標準偏差をTable 1に示した。これらの推測が現実の割合と比べて高いといえるのかを検討した。現実の性体験率として、中学生、高校

Table 1 各学校段階、男女別の性体験率の現実と推測

	現実の性体験率		推測された割合				現実と推測の差の検定	
	男	女	男	女	男	女	男	女
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値	<i>t</i> 値
中学生	12.3%	9.1%	22.0%	(12.9)	25.2%	(13.9)	4.51**	6.95**
高校生	37.3%	45.6%	51.8%	(17.9)	54.6%	(17.8)	4.86**	3.04**
大学生	62.5%	50.3%	74.3%	(16.9)	75.6%	(17.4)	4.19**	8.67**
調査対象者		63.9%			75.6%	(17.4)		4.04**

Note 1. 現実の割合は、中学生、高校生については『児童・生徒の性』(東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会、2003)の調査結果から、中学3年生、高校3年生のデータを用いた。大学生については、『「若者の性」白書』(日本性教育協会、2001)の調査結果から、大学生のデータを用いた。

Note 2. \*\* $p < .001$

Note 3. 調査対象者の推測された割合は日本全体の大学生女性の値を用いた。

生については、東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会(2002)の調査結果のうち、中学3年生、高校3年生の性体験率のデータを用いた<sup>3)</sup>。大学生については、日本性教育協会(2001)の調査データを用いた<sup>4)</sup>。学校別、男女別に、現実の値と推測値の差について、0からの*t*検定を行った。その結果、どの学校段階においても男女とも現実よりも性体験率が有意に高く推測されていた。大学生女子については、推測された割合と回答者における性体験率(63.9%)との比較も行った。その結果、推測の方が回答者の実際の性体験率より有意に高かった。

なお、現実の割合より低いと推測している回答者の割合は、中学生男子33%、中学生女子10%、高校生男子22%、高校生女子32%、大学生男子28%、大学生女子14%であった。

#### マス・メディア接触及び性体験の有無の影響

マス・メディア接触の程度の各指標についてそれぞれ平均値と標準偏差を求めた。その結果、テレビ視聴程度は平均2.83 ( $SD = 1.18$ )、ドラマ視聴程度は平均2.72 ( $SD = 1.52$ )、雑誌講読程度は平均2.61 ( $SD = 1.42$ )、マンガ講読程度は平均2.86 ( $SD = 1.96$ )、J-POP鑑賞頻度は平均3.72 ( $SD = 1.99$ )であった。各指標とも設定した回答段階の中央値より平均値が低かったが、ある程度の分散はみられた。テレビ視聴とドラマ視聴との相関が高かったため、この2変数の標準得点を求め、その平均値をテレビ接触指標とし、以下の分析ではこの指標を用いた。各指標間の相関係数をTable 2に示した。

次に、マス・メディア接触の程度、及び性体験の有無が、性体験率の推測に影響している

Table 2 メディア接触指標間の相関係数

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
(1) テレビ視聴時間					
(2) ドラマ視聴回数	0.56**				
(3) 雑誌講読程度	0.39*	0.29*			
(4) マンガ講読程度	0.21	0.10	0.09		
(5) JPOP鑑賞頻度	0.28	0.40*	0.14	0.03	
(6) テレビ接触指標	0.85***	0.91***	0.38*	0.17	0.39*

Note. \*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

Table 3 マスメディア接触及び性体験有無の性交経験率推測への影響の標準偏回帰係数

	性体験 有無	雑誌 講読 程度	マンガ 講読 程度	J-POP 鑑賞 頻度	テレビ 接触 指標	$R^2$
高校生	男	0.37*				0.14*
	女	0.40*				0.16*
大学生	男		0.46*			0.21**
	女	0.38*			0.39*	0.26**

Note. \*\*\* $p < .01$  \*\* $p < .05$

かを検討した。マス・メディア接触の各指標（雑誌講読程度、マンガ講読程度、J-POP鑑賞頻度、テレビ接触指標）及び性交経験の有無（有群 = 1、無群 = -1）を独立変数とし、各学校、性別の性体験率の推測を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（Table 3）。その結果、中学生についての推測は、男女ともいずれの変数を用いてもモデルが有意にならなかった。高校生についての推測は、男女とも性体験の有無の効果のみが有意であった。大学生についての推測は、男子については雑誌講読程度に有意な効果がみられた。女子については、テレビ指標、性体験の有無に有意な効果がみられた。性体験有群、無群ごとの性体験率の推測の平均値と標準偏差をTable 4に示した。

## 考 察

本研究では、女子短大生を対象に、中学生、高校生、大学生の性体験率の推測に過大視が生じているか、またマス・メディアへの接触程度及び、回答者の性体験の有無によって性体

Table 4 性体験の有無ごとの性体験率の推測の平均値と標準偏差

		有群 (N = 23)		無群 (N = 13)		t 値
		M	(SD)	M	(SD)	
中学生	男	24.13	(12.99)	18.19	(12.31)	1.34
	女	27.52	(13.26)	21.04	(14.54)	1.36
高校生	男	56.57	(15.24)	43.31	(19.61)	2.10*
	女	59.87	(15.84)	45.38	(17.97)	2.51*
大学生	男	78.22	(15.28)	67.38	(17.97)	1.92†
	女	80.22	(15.30)	67.46	(18.43)	2.23*

Note. \* $p < .05$  † $p < .10$

験率の推測に違いがみられるかについて検討した。

性体験率の過大視については、中学生、高校生、大学生のどの年代に対しても男女どちらに対しても生じていることが示された。中学生、高校生の性体験率は1990年代後半に急激に上昇したが、女子短大生は性体験率をそれ以上に高い割合であると考えているのである。しかし、性体験有無別の推測をみると、性体験無群は過大視の程度は小さく、特に高校生女子については、性体験がない群の推測の平均は現実とほぼ同等であり、過大視しているとはいえない。また、大学生については、1999年時点での性体験率の調査結果との比較において過大視が生じているが、調査実施時点の2003年では現実の性体験率がそれより高くなっている可能性が高い。これらの点については、今後さらなる検討が必要である。

マス・メディア接触の影響については、大学生男子の性体験率の推測は、雑誌を多く読む人ほど高く推測していた。大学生女子の性体験率の推測は、テレビやテレビドラマを視聴する時間や回数が多い人ほど高く推測していた。すなわち、同年代の性についての現状認識には、テレビだけでなく雑誌による培養効果もあることが示されたが、マンガや流行歌の影響はみられなかった。しかし、予想に反して、女子短大生にとっては、現実接することが少ない中学生や高校生の性体験率の推測にマス・メディア接触の影響はみられず、むしろ現実接することが多い同年代の性体験率の推測にマス・メディア接触の影響がみられた。その理由としては、次のような可能性が考えられる。女子短大生が接触するマス・メディアに登場するのは、大学生くらいの年齢の性についての描写が多く、中学生、高校生の性についての情報はそれほど多くないため、マス・メディアに多く接触しても、中学生や高校生の性についての認識はあまり影響されないのかも知れない。あるいは、中学生や高校生の性については、今回取り上げた以外のメディアから情報を得ているのかも知れない。この点について



は、今後さらなる検討が必要であろう。また、今回はマス・メディアをテレビ、雑誌、マンガ、流行歌というように非常に大きな単位で扱っていた。しかし、これらのメディアにはさまざまなジャンル（下位分類）があり、どのようなジャンルのメディアに接触しているかで効果が異なるのかも知れない。ジャンルにわけて効果をみることで、今回みられなかったが、マンガや流行歌の効果がみられるかもしれない。

性体験の有無による性体験率の推測の違いについては、高校生、大学生についての推測は性体験がある群はない群より高かった。この結果は、自分と同じ立場の人が多数派であると考えられる傾向であるフォールス・コンセンサス効果が起こっているものと解釈できる。中学生についての推測において差異がみられなかったのは、大学生にとっては、中学生は年齢が離れているため、自分を基準として推測していなかったためと考えられる。本研究の回答者が中学生であったときの性体験率は非常に低いことから（日本性教育協会、2001）、現時点では性体験があっても、中学生時点で性体験があった者の割合は非常に少ないと考えられる。したがって、性体験がある者も、中学生において性体験があることを、自分と同じ立場とみなさなかったと考えられる。

#### 今後の課題

性体験率を過大視することは、若者に様々な影響を及ぼす可能性がある。たとえば、性体験のない者は、自分が遅れている、未熟であるなどの焦りや不安を感じることもあるかもしれない。このような焦りや不安は、場合によっては安易な性行為や性犯罪に結びつく可能性がある。今後は、性体験率の過大視が若者にどのような影響を及ぼすのか、検討していく必要があるだろう。

また、近年の性体験率の増加は、マス・メディアの影響とそれによる性体験率の過大視が関連しているかもしれない。すなわち、マス・メディアの影響で、性体験の過大視が生じ、それにより実際の性体験率も増加する。実際の性体験率の増加はさらなるメディアでの情報の氾濫をもたらす。このような性体験率の増加のサイクルが生じている可能性が考えられる。

本研究からテレビや雑誌への接触が、性体験率の推測をより過大視させることが示された。しかし、これらのマス・メディアにどのような性情報が含まれるかについては、十分な検討がなされているとは言えない。若者の性についての現状認識を培養するメディアのメッセージ内容分析が必要であろう。

本研究は、女子短大生という限られたサンプルであり、本研究で得られた知見を若者全体に一般化することはできない。性体験率の過大視という現象が若者全体にみられるものなの

か、そこにはマス・メディアの影響がみられるのか、さらなる調査が必要である。

## 引用文献

Gerbner, G. & Gross, L. 1976 'Living with Television: the Violence Profile'. *Journal of communication*, **26**, 173-199.

Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. 1982 Charting the mainstream: Television's contribution to political orientation. *Journal of communication*, **32**, 100-127.

Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. 1986 Living with Television: The dynamics of the cultivation process. In J. Bryant and D. Zillmann (Eds.), *Perspectives on Media Effects* (pp. 17-40). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.

Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M., & Signorielli, N. 1994 Growing Up with Television: The Cultivation Perspective. In J. Bryant and D. Zillmann (Eds.) *Media Effects: Advances in Theory and Research* (pp. 17-41). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.

岩男壽美子 2000『テレビドラマのメッセージ：社会心理学的分析』勁草書房。

家庭問題研究所 2003「青少年の性意識と性行動に関する調査研究報告書」<http://www.21human.jp/katei/katei14/14sei.htm>.

国立社会保障・人口問題研究所 2004『わが国独身層の結婚観と家族観：出生動向基本調査』厚生統計協会。

久保正敏 1995「ニューミュージックに見る恋愛風景」『情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ研究会報』、**95**、49-57。

Matabane, P.W. 1988 Television and the Black audience: Cultivating moderate perspectives on racial integration. *Journal of communication*, **38**, 21-31.

松井豊 1990「青年の恋愛行動の構造」『心理学評論』、**33**、355-370。

Mikami, S., Takeshita, T., Nakada, M. & Kawabata, M. 1995 The media coverage and public awareness of environmental issues in Japan. *Gazette*, **54**, 209-226.

文部科学省 2004、2005「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会 議事録」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/index.htm)

Morgan, M. 1982 Television and adolescents' sex-role stereotypes: A longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 947-955.

諸橋泰樹 1998「マス・メディアは恋愛をどう取り上げているか」『現代のエスプリ』、**368**、

198-214。

日本性教育協会 2001 『「若者の性」白書』小学館。

Piepe, A., Charlton, P., & Morey, J. 1990 Politics and television viewing in England: hegemony or pluralism? *Journal of Communication*, **40**, 24-35.

Ross, L., Greene, D., & House, P. 1977 The false consensus effect: An egocentric bias in social perception and attribution process. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 297-301.

Shanahan, J. 1993 Television and the cultivation of environmental concern. In A. Hansen (Ed.) *The mass media and environmental issues* (pp 181-197). Leicester, Leicester University Press.

Signorielli, N. 1989 Television and conceptions about sex roles: Maintaining conventionality and the status quo. *Sex Roles*, **21**, 341-360.

谷本奈穂 1998 「現代的恋愛の諸相—雑誌の言説における社会的物語—」『社会学評論』、**49**、116-131。

東京都 2004 「青少年の性行動について考える委員会 意見のまとめ」<http://www.metro.tokyo.jp/INET/KONDAN/2004/11/40ebf200.htm>

東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会 2002 『児童・生徒の性：東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告2002年調査』学校図書。

東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会 2005 『児童・生徒の性：東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告2005年調査』学校図書。

東京都生活文化局 1982 「大都市高校生の性をめぐる意識と行動」東京都生活文化局婦人青少年企画。

雲野加代子 1996 「漫画におけるジェンダーについての考察(少女漫画の恋愛至上主義)」『大阪明浄女子短期大学紀要』、**10**、187-196。

## 注

1) 日本性教育協会 (2001) と、東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会 (2005) の調査は、調査年度だけでなく、質問方法、調査サンプルが異なるため、性体験率の結果も異なっている。

2) 岩男 (2000) は、Gerbner & Gross (1976) に基づいて、ドラマを「ドラマやアニメーション(アニメ) など、ストーリー性のあるフィクション番組を指すもので、通常ドラマ番組と呼ばれるものを越えた、広範な番組」(p. 31) と定義している。これらは、刑事もの、アニメ、青春ド

ラマ、アニメSF、時代劇、実写SF、ホームドラマ、サスペンス、恋愛・不倫、その他の10のジャンルに分類されている。

- 3) 最新の調査結果は2005年のものがあるが、本調査の実施時期が2003年であるため、その前年の2002年の調査結果を用いた。

また、3年生のデータを用いたのは、中学生、高校生ともに、学年が進むほど割合が高くなっており、回答者が現実の割合として3年生を想定していた場合に、高校生全体の割合と比べて高く推測していても過大視とはいえないためである。すなわち、現実の割合として想定されうる最大限の割合と比較しても過大視が生じているといえるかを検討した。

- 4) この調査結果は本調査実施時期より4年前の1999年に実施されたものである。これ以降に大学生の性体験率について、信頼できる大規模な調査が見あたらないために、このデータを用いた。しかしながら、高校生の性体験率は1999年以降、特に女子において大きく上昇しているため、この調査結果は現実より若干低めであると思われる。